京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

TRANS

「『翻訳』の諸相」研究会　Newsletter No.19

2006/3/16

❀　終刊にあたって　❀

若島　正

文学研究科のＣＯＥプログラムも、この４月から最終年度を迎えます。全体の方針に沿って、わたしたち研究班＜「翻訳」の諸相＞も、いったんその役目を終えることになりました。（ただし、第一研究班は最終的な報告書の作成をめざして、従来どおりの活動をしばらく継続した後に、編集作業に取りかかる予定です。）

そういう事情で、このニューズレター*TRANS*も本号を最終号とさせていただきます。補佐員を務めていただいた河井純子さん、皆尾麻弥さんのご尽力に感謝します。お二人の丁寧な仕事ぶりのおかげで、ニューズレターを休むことなく定期的に発行することができました。そして、このニューズレターの売り物（？）であったエッセイをご寄稿いただいた諸先生方にも、お礼を申し上げます。ややもすると機械的になりがちなこの種の発行物に、ささやかな潤いを添えることができました。どうもありがとうございました。

浜辺の少女とポオ

皆尾麻弥

TRANS の数少ない読者のうち半数の方が上記の題名から想像するのは、ウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』（1955、58）の地形図上に蜃気楼のごとく揺らめき現れる海辺の王国とアナベル・リーであるかもしれない。ところが今回の主役は、ナボコフ同時代に鳥取のとある漁村が生んだ作家、尾崎翠(1896-1971)である。代表作『第七官界彷徨』（1931）の語り手兼主人公の小野町子や、「歩行」（1931）の語り手、その他多くの作品において、砂浜の匂いのする「女の子」を創造した浜辺の奇才を、同じく鳥取の浜辺で育った元少女である筆者がお国自慢として紹介しようというのが、今回の趣旨である。幸いなことに、翠は少なくとも一編の翻訳を手がけており、その貴重な一編によって辛うじてこの類まれなる芸術家は、「『翻訳』の諸相」の片隅に三角座りで出席する資格を得る（もう一作、翻案と呼べるものもあるがここでは触れないでおく）。

「翻訳特集」と銘打たれた『女人芸術』昭和 5 年(1930 年)新春号で、翠はエドガー・アラン・ポオの「モレラ」（1835）を訳している。所謂アラベスク調短編中、「私の最良」とポオ自身も手紙の中で紹介しているこの作品は、美しく聡明な哲学者風の妻の輪廻転生を扱ったものである（ポオの常としてやはりこの短編も、実在した女性の話に取材している）。ここで翠の翻訳技法・技術についてうんぬん述べても仕方がないので、当然のことながら幾つか誤訳もあるものの、おおむね十分鑑賞に堪えうる翻訳である、と言うにとどめておきたい。時に男の一人称の語り手、時に女の一人称の語り手、また時に中性的で特殊な存在感を前面に押し出す三人称の語りの声を自在に操る翠のような作家にとって、ポオの語り手であるこの苦悩する陰鬱な男の声音を真似することなど容易いことであったろうと想像される。

ロシア文学やドイツ文学（の翻訳作品）を享受していた翠はまた、西欧の思想や文学を模倣・移入したことによって開拓されたロシア文学と比較して、日本文学も移入・模倣時代にあるという見方を当時いみじくも表明している。西欧の文学に学ぼうとする姿勢の強い翠であるが、彼女の作品は模倣など微塵も感じさせない、べったりと翠色に染まった世界である。そうした彼女の得意技の一つが、愛する芸術家の姿を翠色に染め変えて、つまり翻訳して、作品中に取り込んでしまうというものだ。気に入らない人物について語る時に筆が冴えるナボコフとは逆に、翠の筆は愛する芸術家を描く時にその本領を発揮するかに見える。翠は、大好きな実在の銀幕役者や詩人、小説家の体の部位を一度ばらばらに解体し、特別愛着のある部分だけを拡大した、茶目っ気たっぷりの人形のようなものに作り

変える。そうしてチャーリー・チャップリンは「杖と帽子の偏執狂チャアリイ」となり、チェホフは「何処かの国の黄昏期に住んで」いる「地下室アントン」あるいはいつも微笑しているチェホフ小父さんとなる。こうして彼ら偉大な人物は魅力的な部分のみ拡大され、次にそのまま全体に縮小されるという経緯を経て、翠の世界における登場人物サイズに見事収まってしまう。実在の人物像を独自の造語を駆使して翻訳し、自身の作中人物と同じ背丈の、どこか滑稽で随分と身近に感じられる存在に読みかえるというこの技もまた（少なくとも我々の研究会の内では)、一種の翻訳と言えよう。

さて、話をポオに戻さねばならない。翠のアイドルは何と言ってもチャップリンであり、この人に関して翠の筆はまだ書き足りないかに見える。一方、もう一人の口髭の男に関しては、確認しうる限り僅か二度の言及にとどまっている。即ち、件の翻訳特集号末尾に付された「原作者略伝」と、同年 7 月に出された雑誌『詩神』に載った、「陰の男性への追慕」中のほんの一言である。しかし、「モレラ」の訳とこれら二つの言及だけで、翠にとってポオは気にかかって仕方のない存在であったに相違ないと思わせるのに十分である。そしてこれだけで、ポオは幾分、翠サイズに圧縮・一部拡大されかかっている。即ち我々が見知っているあの肖像の、始終むっつりして、不吉に澱んだ二つの小さな底なしの水溜りを思わせる目玉と眉との間にとてつもない深淵を住まわせた、できれば会いたくないような人物を、翠の筆はいつもの調子で愛すべき特徴とともに可愛らしく視覚化しようと宙でかまえられている。「ストリンドベルクの心臓弁膜にポオの脳味噌の襞を加へたり……」という表現から分かるように、翠にとってポオのチャームポイントは、外見には現れない臓器の襞につきる。「『人生の再現』に対しては『図案化者』」である、とても魅惑的な襞を持った脳味噌の持ち主、これが翠によるポオの肖像であるが、問題はこれがその他のお気に入りの芸術家のそれと違って、いっかな図案化し難い、概念的な肖像であるということであろう。「モレラ」の翻訳は恐らく、そうした図案化し難く目に見えない（しかし「チャアリイの肩」に匹敵するほど魅惑的な）ポオのチャームポイントである脳味噌の襞を、奥まで丁寧に筆でなぞることによってそれを視覚化する、唯一の手段であったとも言えるのではないか。

（このエッセイ執筆にあたり、90 年代に入ってから着実に増えてきた翠研究、とりわけ森澤夕子さんによる研究を参考にさせていただきました。）

研究会の報告（発表レジュメ）

「テキスト輪読：Aleksandr Pushkin. *Eugene Onegin*. Translated from Russian, with a Commentary, by Vladimir Nabokov. Princeton University Press. 1975.」範囲：第 8 章第 15 連から第 35 連まで（pp. 174-227）

当該箇所でタチヤーナと再会を果たしたオネーギンは、彼女への恋心を募らせてゆくことになる。「オネーギンへ宛てたタチヤーナの手紙」（第 3 章）がそうであったように、結果的になんのドラマティックな展開も招来しない「タチヤーナに宛てたオネーギンの手紙」もここに含まれる。むろんこれら対をなす無償の「手紙」が『エヴゲーニイ・オネーギン』のすれ違いというメインテーマを優雅に支えていることはいうまでもない。

だが、今回の範囲での読みどころは、オネーギンの手紙がタチヤーナの心に届かないといったところであるよりも、むしろふたりが再会を果たし、あるいはすれ違いを実演してゆく夜会の場そのものの描写にこそあるだろう。とりわけプーシキンによって取り下げられたヴァリアントにたいするナボコフの視線は、彼が折に触れて繰り返してきたこの小説のクロノロジーの指摘に見事な説得力をもたせている点で興味ぶかい。

第 27 連にはふたつのヴァリアントがある。ナボコフによれば、テクストにあるこの連はそれらヴァリアントにくらべてはるかに劣る。ではなぜすぐれたヴァリアントが破棄されることになったのか。

すでにふれたようにこの前後でプーシキンは彼特有の列挙のリズムにのせて夜会の客の様子を描き出している。プーシキンの執筆は 1830 年、舞台は 1824 年秋。テクストの第 27 連では他の卑俗な客と交わらず、タチヤーナに心を奪われているオネーギンの姿が描かれ、つれない相手にたいする恋情は禁断の実に手を伸ばしたイヴ以来世の常だといったことが述べられている。ナボコフによればこうした一般化をともなうテクストにたいし、ふたつのヴァリアントははるかにすぐれている。第 27 連の下書き a では美女ニーナの登場が官能的に描かれ、それに目もくれないオネーギンが描写される。下書き b では皇妃アレクサンドラの登場にかしずく客たちとの対照でオネーギンの姿が描かれている。技術的にみてもこうした対照をもとにオネーギンを提示したほうが効果的なのはいうまでもない。だが、プーシキンはそれをとらなかった。ナボコフによればその理由のひとつは、プーシキンが彼女たちをうまく描きすぎたからだ。彼女たちがそれぞれ美しく描写されればされるほど、オネーギンの情熱が効果的に浮かび上がる一方で、読者の目にはタチヤーナの存在がかすんでしまう。第二の、とくに下書き b が破棄された理由は、皇妃アレクサンドラの導入が、アナクロニズムを生んでしまうからだというものだ（1827-1829 年のニコライ一世時代の舞台装置が混入してしまう）。皇妃の異名ララ・ルークから広がる l、k、r の音

韻も美しいこの下書きが破棄されなければならなかった理由としてはすぐれて説得力のあるものだといえよう。ナボコフが自分の創作態度をプーシキンに反映させて『エヴゲーニイ・オネーギン』を読んでいるという指摘はよくなされるところだが、そうしたナボコフ的な読みがときに驚くべき説得性を帯びてくる好例である。

だがもちろんプーシキンがどこまで小説内部のクロノロジーに厳密だったかは疑問の余地がある。実際、第 17 連（1824 年 8 月）では夜会の客としてスペイン大使の姿も垣間見えるが、ナボコフが指摘しているところでは 1822 年の国交断絶以降、1825 年以前にスペイン大使がロシアに着任していたとは考えにくい。

こうした瑕疵はあれ、プーシキンが彼なりにクロノロジー的忠実を旨としていたことは認めていいだろう。しかしナボコフの指摘はそれをはるかに凌いでいる。

第 35 連（場面は年が明けて 1825 年）ではいったんタチヤーナを諦めることにしたオネーギンが読書にふけるさまが描き出され、プーシキンはおなじみの列挙の手法によってオネーギンの読んだ作家名を並べてゆく。ナボコフもまた「（オネーギンは）文集も雑誌も読んだ」という詩句を註解して 1824 年末から 1825 年初頭にかけて発表された作品を列挙するのだが、そこには『エヴゲーニイ・オネーギン』第 2 章第 7-9 連（文集『北方の花々』1825 年号）や『エヴゲーニイ・オネーギン』第 1 章（1825 年 1 月単行本化）も含まれてくるのだ。青春時代の自分の姿をそこに認め懐かしさを憶えるオネーギンを思い描くナボコフの姿勢は、19 世紀前半の小説にたいする註釈だという点を差し引いても、作家特有のジョークであるようにみえるだろう。実際ナボコフは虚構と現実の厳格な区別を読者に要求する作家のひとりだった。だがそうやってこうした註釈を切り捨て、あるいは逆に享楽するのはたやすい。われわれはむしろそうした戯れめいた言葉のなかにこそ、「芸術の現実性と歴史の非現実性」（第 16 連 9-10 行目への註釈より）のナボコフ的真実をみてとるべきではないだろうか。

（小西昌隆）

お知らせ

♦第一研究班が、以下の要領で、第 20 回研究会を開きます。ご参加ください。

日　時：　2006 年 3 月 25 日（土）　午後 1 時より

場　所：　京都大学文学部東館　４５４号室

報　告：　松本ドロタ（京都ノートルダム女子学院大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 8 歌第 36 連から Onegin's Journey[11]まで」

活動状況

♦第一研究班が、以下の要領で、第１9 回研究会を開きました。

日　時：　2005 年 1 月 7 日（土）　午後 1 時より

場　所：　京大会館　216 号室

報　告：　小西昌隆（早稲田大学）「ナボコフ訳・注『オネーギン』第 8 歌第１５連から第３５連まで」

この研究会の発表要旨を、エッセイの後に掲載しています。

後記：ニューズレター *TRANS* の 19 号をお届けします。寂しいことですが、この４月から当研究会は大幅に縮小されることになりました。このニューズレターをお届けできるのも今回限りです。また、来月からは私にかわりまして、塩谷直史さんに補佐員をしていただくことになりました。おしまいまで失敗の連続でしたので、皆様にはご面倒をおかけしました。この場を借りてお詫びいたします。これまでニューズレターをお読みくださいました皆様、執筆者の皆様をはじめ、当研究会にいろいろな形でご協力くださいました皆様に、心からお礼申し上げます。

（皆尾記）

研究会事務局

〒606-8501

京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

英米文学研究室（担当：皆尾）

tel./fax: 075-753-2828

e-mail: trans-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

web page: http://www.hmn.kyoto-u.ac.jp/trans/